

満洲国へ招聘された 金子翁の思い出

福 渡 一 雄

昭和十四年の夏、金子さんは満洲国の招きにて渡満され三四日大連に滞在、愈々満洲国に入らるる事になり当時鞍山に居りました小生へ、日商大連支店長（現日商常務）石谷金次郎君より「金子さんは明日の（はと）にて当地に行かれる、それから先は宜敷く。なお金子さんは風呂は嫌いだが温泉はお好きのようだから為念」との電話に然らば湯岡子（満洲における満鉄経営唯一の温泉地）に下車さるるよう回覧し、翌日駅頭

に出迎えたところ、頭に氷袋をのせ元気に展望車より降りられ「やあ達者でやっちゃんかよ、わしゃ初めて外国の土を踏んだが満洲の汽車は仲々良いのう」と云われるので、ご承知の通り日露戦争により取ったものの、わが国の力では経営困難とて米国の依頼、仮契約迄したが小村外相の烈しき反対にてキャンセルした、その埋め合せに鉄道用品を買入れた由にて総てが米国式です、と話しながら白樺のトンネルを五六分歩いて

今 村 薔 橘

賀状呉れたる戦友やいま牧師寒の薔薇ただ一輪にしてまつ赤鶯に 仰げば三条飛行雲初桜吾も源氏の血を亨けて白人のマドロスの群春惜む

閣蘭の間（蘭は満洲国花当ホテルの貴賓室、松岡満鉄総裁の休養室）にご案内早速同室付属の温泉に入って貰った。風呂がお気に召したか仲々の上機嫌、直ちに中井、横尾、菅原の

会社満洲製造所）の幹部諸君を紹介、夕食を共にして明朝九時お迎えを約して帰宅せんとせしところ、今夜は少々話したいから一緒に泊まると引止められ、遅く迄種々小生としては初めて聞く話ばかりだったが特筆すべき事は
合名会社に組織を更えたる根拠であった。当時鈴木は小企業の個人経営の砂糖屋であったが、続々と外国糖を輸入するその買付け契約は、現物が神戸に着後九十日サイトであったから、為替手形の引受けをして荷物を引取るのであるが、余りに金額が嵩むので為替銀行たる横浜正金銀行が不安を感じるようになり、何か良き方法をと研究の結果、或る日金子さんを出し支店長より『金子さん、お店は仲々お盛んでお芽出度き限りですがまだまだご発展なさるお店です。一つ私の云う通りやって見ませんか。それは外部から見れば鈴木は店主も幼小、お店の幹部は皆若くしかも一介の個人経営で商売に最も肝心な信用の点甚だ失礼ですが貧弱という外ありません。
世間は株式会社その他会社組織とし資本金を表に出し経理の内容も外部に判るように努めておるのです。それで株式会社は良いが種々と面倒

の事がありますから資本金五十万円くらいの合名会社にされたら無限責任でもあるし信用はぐっと高まり益々繁栄万々歳間違いないありません。ご相談の上是非ご賛成下さい。元町一丁目中村内外交渉事務所というのがありますから、私から聞いたと言われれば一切の手続きはやってくれます』との話にすぐさま店の幹部協議の結果、外ならぬ正金のご親切やって見ることにし中村内外交渉事務所内に依頼して設立をすませた。おおよそ会社の組織は会社自身がその必要上作るのであるが、独り鈴木だけはさような六ヶ敷い法律の判る者は居らず、正金が万一手形支払不能の場合を懸念し己れの安全のために勧めて出来た合名会社鈴木商店である。これらが縁になりその後正金は鈴木のため誠に厚き友情を示され感謝致しておる、このことはまだ誰にも話したことなく今日は誠に気分がよいので話した訳だが、機会があれば鈴木関係の諸君に伝えてくれとの伝言の際にその責を果します。翌朝九時迎えの車にて先づ鞍山工場を見て貰い続いて昭和製鋼所に在社中の梅根、矢野両事務の総務担当重役（他の重役は不在）と会談、正十二時太孤山の鉄鉱石爆破の壮快なる

現場を案内、梅根さんより火薬より半値の液保酸素を使って探鉱しておると説明されると金子さんは「ああ左様か、先年わしは山本条太郎君（前の満鉄総裁）にこの話をしたことがある。山条わしの話を実行したな、福渡よすぐ辻に（神鋼と満洲国政府合併株式会社石炭液化研究所社長辻漢氏）奉天に造る工場をこの地に更えて昭和製鋼は水から必要な酸素を取られる、後に残った水素は石炭液化に主要な物だからこの旨を良く伝えよ」と命令された。これより

「随想」生き抜こう

柳 田 義 一

昭和製鋼貴賓館にて昼食を終え新京行きの（はと）にて機嫌よく出発されたが、見送りの梅根さんは会社の帰途中にて金子さんの令名は良く聞いていたがあの老齢で仲々新しい化学の知識を持っておられるには感心と衷心より褒めておられた。予定通り金子さんは満洲国政府の要務を終えられ帰国されたが不肖はこれが金子さんとの最後になろうとは思いますが寄らぬこと、時々翁のありし日を追慕致しています。

命あつての物種、命あつての芋種と昔から云われているが、あの林美美子の放浪記「花の命の短かくて……」の一節を読まれる何人かは自分のことに思い馳せることであろう。又人の命のもろいことは蓮如上人が書かれた御文章の一節等を読み聞かされる時その如何に果かないものかがわかる。如露は如露である。

しかし思い返して強い方から云うなれば人のいのちくらい頑強なものはいくつもない。精巧な自動車でも一

年半位で取り替えて仕舞うのとは違い、七十年生き延びた者はさらにいふし、八十、九十の人も今日ではさほど珍らしいことのように思えず百才以上で尚びんぴんとしていられる人もテレビ等で見うける。又わが辰巳会員にも今回調べたところ喜寿以上の方が六十五名居られる事も立派に力強い証拠立てとなつていふ。内臓と骨格に肉を着け薄い皮を張っただけの微妙なる構造に依る人体の耐久力は全くおどろきと云うより

言葉がない。又、種も仕掛けもあらばこそ造化の力と云うのか神仏の成す業とでも申さねばなるまい。

因果応報と云う理屈もあるが、しかし一所懸命からだに気をつけながら不幸短命に終るものもあれば不養生のある限りを働いてあまつさえ長生きするものもあるから叶わない因果、必ずしもここでは当てにならないと思うことがある。之はつまるところ人事を尽くして天命を俟つ外はなさそうだし魂の宿る間一寸先は全くの暗だからやるだけの事をやってあとは運命にお委ねするよりだてがなさそう。宿命をいかにあがいて見てもどうにもなるまい。きようはきよう、明日は明日である。日々是好日、随所有楽と安穩に暮すことが出来たら先づ生れた甲斐があったと喜ばなくてはなるまい。

明日のことを思いわずらうな、明日のことは明日自身思いわずらうであらうと思えば良い。一日の苦勞は一日だけで充分である。苦勞はあつても気にかげず迎えることが出来れば良い。とにかく物に屈託せず朗かな気持でその日を送る心掛けが必要である。くよくよして見たところどうにもはじまらない。

「何をくよくよ川端やなぎ水の流

れを見て暮らせ」と毎日を流してゆくことが利口になるようにも感じる諺あり「朝に道を聞けば夕べに死すとも可なり」と学者連も道義的にこう叫んでいる。

何事も運命のままだが運命の操縦は絶体でできない。運命の糸をたぐつたら因果の二字に落ちつくのかも知れないし最後には神が背に控えてござるとも考えられて来る。

人の力はそこまではとどかないことは確かだ。たよりないことながら闇に手操りで最善と信ずるところへ邁進すること以外に方法はない。

「大化の中に縦浪す」とは陶淵明のことばであるが、大化は自然であり運命と解してもよい。身を自然に託し運命にゆだねてその通りにさせておくと云うことらしい。

俳人一茶は「元日やあなたまかせのおらが春」と詠じているのもその心随ではなかったか。

お互い生き抜けるだけは生き抜ける人生、摂生を専一に、取り越し苦勞を出来るだけ排して悔なき人生をこの上とも護りつづけるところに生き抜ける秘訣の鍵があるようだ。

空堀の山が立つ死生の観梅天に

三九、九、三〇